



10

世界文学全集

ナ ナ

ゾラ／川口篤・古賀照一訳

新潮社



世界文学全集 10

ナ ナ

エミール・ゾラ

訳者 川口篤／古賀照一

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／二光印刷株式会社 製本所／大進堂製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／日本紙パルプ商事株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

ナ

ナ

..... 3

エミール・ゾラ

..... 487

Nana
by
Emile Zola

ナ

ナ

九時というのに、ヴァリエテ座の見物席はまだがらんとしていた。数人の観客が、二階^{バルコン}棧敷や平土間^{オルケスト}特等席で、まだ薄暗いままのシャンデリアの淡い光を受け、柘榴^{ヘイネツト}石色のビロード張りの肱掛^{ひじかけ}椅子^{いす}に身を沈めて、開幕を待っていた。赤い大きな緞帳^{どんちやう}はやみの中に没している。フットライトはまだともされず、楽士たちの譜面台は乱雑なままで、舞台からは物音一つ聞こえて来ない。ただ、上のほうの、ガス灯の光で緑色に染められた大空の中に裸身の女神や幼児たちが天駆けつている円天井^{まるてんじやう}を囲む四階^{さじき}棧敷では、ひっきりなしのざわめきがうまれ、その中から呼び声や笑い声がわき起こっていた。金で縁飾りをした円いかまちの下に、縁^{えり}無帽^{むぼう}や烏打帽をかぶった頭が段々になって並んでいるのだ。時折り、一組の紳士・淑女を前にたてた女案内人が切符を手にして忙しそうに立ち現われては、座席

の案内をしていた。案内される夜会服をきた紳士ときゃしゃではっそりした淑女の一組は、きまってゆっくりあたりを見回しては席に着いた。

平土間^{オルケスト}特等席に、二人の青年が現われた。二人は立ったままあたりを見回していたが、

——だから言わないことじゃないよ、エクトル。と年長の方の、黒いチョビひげをはやした大柄な青年が叫んだ。早く来すぎたじゃないか。僕が葉巻を吸い終わるまで待ったってよかったんだ。

この時、一人の女案内人が通りかかった。

——あら、フォシュリーさん、と彼女はなれなれしく話しかけた。もう三十分もしなければ始まりはしませんわ。

——じゃあ、なぜ九時開演だなんてポスターを出すんだい？ と面長の顔にむっとした色を浮かべてエクトルがつぶやいた。しかも、この芝居に出ているクリスが、正九時開演です、なんて言ったのは、つい今朝^けほどのことなんだからね。

しばらくのあいだ、二人は口をつぐんだまま、顔を上げて、二階ボックス席の薄暗がりの奥を目で探して

いた。だがボックス席は、壁紙の緑のせいで一しお暗かった。その下の一階^{さじき}に上って真っ暗やみだった。二階^{さじき}に上っては、手すりのビロードに身をもたせかけている太った貴婦人が一人いるだけだった。高い柱のあいだの翼^{アウアン・セーム}席は右も左もがらんとしたままで、長い総^{よさ}のついた飾り幕が張りめぐらされている。白に金を配し、薄緑色に引き立てられた場内は、切り子ガラスの大きなシャンデリアのキラキラする反射を受けて、まるで霧が立ちこめているように、ぼうっとかすんでいた。

——リユシーのための翼^{アウアン・セーム}席はとつといたかい？とエクトルが尋ねた。

——うん、だが楽しなかったよ。もっともリユシーが早く来すぎるきづかいはないがね、あの女のことだから、とフォシユリーは答えた。

彼は軽いあくびをかみころした。そしてしばらく黙っていたが、

——君は運がいいよ、まだ、初日を見たことなんかないんだからね。この『金髪のヴィナス』は今年^{こぞ}中で呼び物になるぜ。もう半年このかた前評判がたつて

いるんだ。だがねえ君、かねや太鼓ではやしたてて、さて幕をあけてみると犬ころ一匹、ってことになるんじゃないかね。商売じょうずのボルドナヴが大博覧会をあてこんで今まで出さずにおいたんだがね。エクトルはつつしんで拝聴していた。そしてこう尋ねた。

——ヴィナスを演^やることになっている新スターのナナを、君は知ってるのかい？

——おやおや、また始まった！ とフォシユリーは両手をあげて叫んだ。今朝^{けさ}からナナの話でうんざりしてるんだ。二十人以上に会ってるが、会う人ごとに、こっちでもナナ、あっちでもナナだ！ ナナなんて知るもんか。まさかパリ中の女を一人残らず知ってるわけじゃあるまいし、ナナはボルドナヴのでっちあげさ。どうせくだらぬしろものに違いないよ。

こういつてから、彼はだまりこんだ。場内のがらんとした閑散さや、シャンデリアの薄暗さや、ひそひそ話とどびらの開閉の音だけしかない教会のような静けさにいらいらしてきたのだ。

——ああ！ いやだ、と彼は不意に叫んだ。こんなと

ころにいたんじゃ、ひどくじむさくなっちまう。出るよ、僕は。下に行けば多分ボルドナヴに会えるだろう。そうすれば彼から詳しい事情を聞けるかも知れん。

下では、検札場のある大理石を敷きつめた大玄関にお客が姿を見せ始めていた。あけ放たれた三つの鉄格子からは、四月の晴れた夜空の下に雑踏し燃え立っている大通りの活気に満ちた人々のゆきかいが見えた。馬車の響きがびたりとやみ、開いたとびらが音高くふたたび閉じられると、お客が数人ずつはいって来る。検札場で立ち止まり、突き当たりの二重階段を登って行く。婦人たちは体をゆすりながら遅れがちにあとを追う。書き割りの寺院の柱廊めいた、帝政時代ふうなお粗末な装飾をほどこしたこの広間の青白い裸の壁に、黒い肉太の字でナナと書きつけられたたけ高い黄色いポスターが、ガス灯のあざやかな光を浴びて、どぎつく並んでいた。男たちは足を止めて、それを読んでいた。また別の男たちは突っ立ったまま、入り口をふさいでおしゃべりをしていた。一方、切符売り場の近くでは、ひげそりのあとも生々しい大きな顔のがんなじような男が、どうであつても席を手に入れようとす

る人々に向かってつっけんどんな返答をしていた。

——やあ、ボルドナヴだ、と階段をおりながらフォシュリーが言った。

ところが支配人の方ではとくにフォシュリーに気付いていた。

——やあ、これはこれは、と彼は遠くから叫びたてた。あんたって人はまったく人が悪いよ。うちの記事を書いてくれるというのはどうしたんです……。今朝、『フィガロ』をひろげてみたら、一言ものってやしない。

——ちょっと待ってくれたまえ！ とフォシュリーは答えた。君のご自慢のナナについて書くには、まずお目にかからなきゃあしようがないし……。それに、僕はなにも必ず書くなんて言やあしなかったよ。

彼はこの話を切りあげようとして、学業の仕上げにパリに出て来た青年で、彼のいとこにあたるエクトル・ド・ラ・ファロワーズを紹介した。支配人はひと目でこの青年の値踏みをした。だが青年の方では、感動して支配人をつくづくとながめていた。女を看守のように扱いながら見世物にする興行師、いつも奇抜な

広告の着想にわき返る頭を持ち、かなりたて、つばを吐き散らし、なにかというと自分で自分の膝をたたき、腹黒くて、憲兵のような気性を持った男、それがこの目の前にいるボルドナヴなのだ！ エクトルは、なにか愛想のいい言葉を見つけないかと思つた。

——あなたの劇場は……、とエクトルは優しく澄んだ声で言いかけた。

するとボルドナヴは、ぎくばらんやりとりを好む男だといわんばかりに、臆面もない言葉で、平然と相手をさえぎって言った。

——私の淫売屋いんばいと言ってもらいたいですな。

これを聞いて、フォシュリーは賛成の微笑を浮かべた。だが、ラ・ファロワーズのほうはすっかりどぎまぎして、あいさつの言葉が喉に詰まり、せいぜい相手の言葉の意味を味わっているようなふりをするのがやっとだった。しかしその時はもう、支配人のほうでは、その新聞評が大きな影響力を持っているある劇評家のほうに急ぎ足でつかつかと近よって、握手をしていた。彼がふたたび戻って来た時、やっとラ・ファロワーズは立ち直っていた。あまりへどもどした様子を見せ

て、いなか者扱いされることを彼は恐れたのだ。

——評判では、と彼はなんとしてもなにか話題を見つけたいと思つてふたたび口を切った。ナナはすてきな声をしてるそうですね。

——ナナが！ と支配人は肩をそびやかして叫んだ。噴霧器そっくりな声でさあ！

青年はあわてて付け加えた。

——でも、ともかく立派な女優なんでしょう？

——ナナが！ ……木偶の棒こくでさあ。手足の置き場所も知りやしない。

ラ・ファロワーズはほんのり顔を染めた。もうわけがわからなくなった。そして口ごもりながら言った。

——なにがなんでも、今夜の初日だけは見落とせないといい場所ですね。僕は知っていたんです。あなたの劇場は……

——私の淫売屋いんばいと言ってもらいたいですな、とボルドナヴは自信のある男の冷やかながんこさを見せてふたたびさえぎった。

これまでフォシュリーは、落ち着きはらって、はいってくる婦人たちをながめていた。しかし、いところが

笑ったらいいかおこったらいいか分からなくなつてぼかんとしているのを見ると、助け舟を出した。

——さあ、ボルドナヴ君を喜ばしてやりたまえ。お望み通りの名で彼の劇場を呼んだらいいさ。そう呼んでもらうのがうれしんだから。ところで、ねえ君、僕たちをかつがないでもらいたいね。君のナナが歌もうたえず、芝居も出来ないとしたら、君は失敗する、それだけの話だ。もっともそれを望んじやいないがね。

——失敗！ 失敗だって！ と支配人は顔を真っ赤にして叫んだ。女に芝居や歌の出来る必要がありますかい？ 君はまったく血のめぐりが悪すぎるよ。どうして、どうして、ナナにはちゃんと別の物がありますか。ほかのすべての物に代わる物があるんだよ。そいつをわしがかぎ出したんだ。それがまた大したしろもので、万一それが嘘だったら、わしの鼻はもうばかになつてゐることなんですか……まあ、今に分かる。ナナが舞台に出さえすりゃいいんだ、それだけで小屋中があんぐり口をあけて見惚れまさら。

支配人は大きな手をふりあげてしゃべっていたが、

その手は興奮でぶるぶるふるえていた。やがて気がしずまると、声をひそめてひとり言のようにつぶやいた。

——そうとも、ナナは大当たりだ、へへ、有り難い、大当たりさ……あのはだときたら、あのはだときたらまったく！

それから、ファッションリーが尋ねるままに、彼は、いろいろ詳しい話をはじめたが、その臆面もない表現にラ・ファローズはへきえきした。ボルドナヴは前からナナを知っていて、いつか世に出してやろうと思っていた。ところがちょうど、ヴィナスを演る女優を捜すこととなった。彼は、一人の女にいつまでも、気を使うたちではなかった。すぐさまお客の楽しみに供するほうが好きだった。ところがこのナナという大柄な女の出現に、彼の一座はかきまわされ、めんどろなもめごとが起きていた。立派な芸をもちすぐれた歌い手でもある一座のスターのローズ・ミニョンが、ナナが自分の地位を脅かす競争相手となると見てとると、かかんにおこって、自分が一座から脱退して計画をぶちこわしてやると毎日彼を脅かすのだった。ポスター

のことでは、大騒ぎだった。つまり、彼は二人の女優の名を同じ大きさの字で書くことに決めていたからである。だがなんといっても、彼の気持ちにさからうわけには行かなかった。彼のいわゆるあまっちょの一人、たとえばシモーヌとかクラリスだとかが素直に言うことを聞かないような時には、彼はその尻をけとばすことになっていた。そうでもしなければ、やって行けないのである。彼は女たちを売り物にしていた。女たちの値打ちをよく心得ていたのだ。たかが淫売じゃないか！

——やあ、ミニョンとシュタイネルがやって来た、と言って彼は話を打ち切った。あの二人はいつも一緒だ。ご存じだろうが、シュタイネルはローズが鼻につき出したんだ。そこでローズのご亭主はシュタイネルに逃げられては大変と、へばりついているのさ。

劇場の軒蛇腹にもえているガス灯の列が、歩道に強い光の帯を投げかけていた。小さな二本の木があざやかな緑の色を見せてくっきり浮きあがっている。一本の円柱は真っ白に見えるほど強く光をあびていたので、そこにはりつけられているポスターが真昼のよう

に遠くから読みとれた。そしてその向こうには、絶えまなく動いている群衆の波の中に灯火がかがやいて、大通りの濃いやみに光の刺繍をほどこしていた。すぐには中にはいらず、場外で葉巻を吸い終えるまで話を交わしている大勢の人々がいた。ガス灯の光がそれらの人々を青白く染めて、黒く短い影をくっきりと、舗道の上に描いていた。そんな人々の群れをかきわけながら、ひどく背が高くがっしりした、見世物の力業の大男のような角顔のミニョンが、背はごく小さいが早くもおなかの出張った、灰色の頬ひげを一面にはやしたまる顔の銀行家のシュタイネルの腕をとって、引きずるようにしてやって来た。

——ねえだんな、とボルドナヴが銀行家に言った。だんなは昨日あたしの部屋であの子にお会いになったんでしょ。

——ああ、あの子がそうだったのか、とシュタイネルは叫んだ。そうじゃないかとは思ってたんだが。だになにしろ私の出るのと入れ違いだったんで、ほんのちらっとしか見なかったがね。

ミニョンは目を伏せて、指にはめた大きなダイヤモンド

ンドを神経質にいじりながら聞いていた。ナナのことだとはとくに分かっていた。やがて、ボルドナヴが初舞台を踏むこの女のことをいろいろ話し進むにつれて、銀行家の目が輝いて来たので、ミニョンはついに話の中に割ってはいった。

——ねえ、あんな淫売なんかほっとけばいいじゃありませんか！ どうせ世間のつまはじきになるに決まってるんですから。ねえ、シュタイネルさん、家内が楽屋であなたをお待ちしているんですよ。

彼はシュタイネルを連れ去ろうとした。だが、シュタイネルはボルドナヴから離れようとはしなかった。彼らの前、検札場のところで行列がくずれ、騒々しい人声がわき起こって、その中からナナという名前、そのはぎれのいい、音色のいい名前が鳴りひびいていた。ポスターの前に立ち止まっている男たちは、声高にナナという名前を読みあっていた。通りすがりに、かげんそうな口調でそれをつぶやく男たちもいた。一方婦人たちは、不安そうに微笑を浮かべて、さも意外らしく、そっとその名を繰り返していた。だれ一人ナナを知っている者はなかった。どこからナナは降って

わいたのだろうか？ さまざまなうわさがひろがり、さまざまなゴシップが耳から耳へとささやかれていた。ただナナという名は耳に快く、親しみのあるこの短い名はだれの口にもものぼった。ナナと発音するだけで群衆はもう陽気になり、たわいもなくうきうきとしてくるのだった。人々を夢中にさせる物見高さ、狂気の発作にも似たあの激しいパリの物見高さが、群衆をかりたてていた。みんながナナを見たがっていた。ある貴婦人はドレスのすそ飾りを引き裂かれ、ある紳士は帽子をなくしてしまった。

——ああ！ そう責め立てられても困りますよ。と二十人ばかりの人から質問責めにあっているボルドナヴが叫んだ。ナナは今すぐご覧になれるじゃありませんか。これで失礼させてもらいますよ。用事がありますからねえ。

彼はお客をあとに立てたことにほくほくして、姿を消した。ミニョンは肩をそびやかしてから、ローズが第一幕の衣装を見せるためにあなたをお待ちしているんですよ、シュタイネルの注意を引いた。

——おや！ リュシーがあすこにいる。いま馬車か

ら降りて来るところだ、とラ・ファローズがフォシユリーに言った。

たしかにそれはリュシー・ストウワールだった。首の長すぎる、やつれてやせた顔に唇くちびるの厚い、四十格好の醜い小柄な婦人だが、ひどく快活で愛嬌あいきょうがあるので、魅力に富んでいた。彼女はカロリーヌ・エケとその母親とを連れて来ていたが、カロリーヌは冷ややかな美しさを備えており、母親はわらでも詰められたようなもったいぶった様子をしていた。

——あなた、私たちと一緒にいらっしゃいね、あなたの席をとっておきましたから、とリュシーはフォシユリーに言った。

——そりゃ、だめだ。君の席なんかじゃなんにも見えない。僕にはかぶりつきの席がとってあるんだ。平土間特等席ホルケストルのほうがいいからなあ、と彼は答えた。

リュシーはむっとした。人前で自分と同席したくないと言うのだろうか？　だが、急いで気をしずめて、話題を変えた。

——ナナをごぞんじだってことなぜ私に言って下さらなかったの？

——ナナ！　ナナなんて会ったこともないよ。

——本当？　……、確かにあなたは一緒に寝たってうわきですもの。

だが、この時、彼らの前で、ミニヨンが唇くちびるに指をあてて、黙れという合図をした。リュシーがそのわけを聞くと、彼は向こうを通って行く一人の青年を指さして、

——ナナの情夫だよ、とささやいた。

皆の目が注がれた。その青年は感じのいい男だった。フォシユリーはその男を知っていた。ダグネといって、女のために三十万フランの金を蕩尽とうじんし、今では相場に手を出して、女たちに時折り花束を買ってやり、レストランへ連れて行ったりする小金をかせいでいる男だった。リュシーは目が奇麗だと思った。

——あら！　ブランシュだわ！　とリュシーが叫んだ。あの人よ、あなたがナナと寝たことを教えてくれたのは。

奇麗な顔に厚化粧をした金髪の太った女のブランシュ・ド・シヴリーは、すらりとして大変身だしなみのいい、ひとときわ上品な紳士と連れだっていた。

——グザヴィエ・ド・ヴァンドゥーヴル伯爵^{はくしやう}だよ、とフォシュリーがファロワーズの耳にささやいた。

伯爵が新聞記者のフォシュリーと握手をかわしているあいだに、ブランシュとリュシーとのあいだには、はずんだ楽屋の裏話がとりかわされていた。この二人の女は、それぞれ水色とバラ色のすそ飾りのついたスカートで通路をふさいでいた。そしてナナという名が、だれの耳にもはいるほど鋭い声で繰り返し二人の唇にのぼった。ド・ヴァンドゥーヴル伯爵はブランシュを伴って立ち去った。しかし、今や、ナナという名は、おあずけを食って一層欲望をそそられるように、いよいよ高らかに、あたかもこだまのように玄関のすみずみにまで鳴りわたっていた。まだ始まらないのだろうか？ 人々は時計を出して見た。遅れて来た者たちは馬車が止まりきらぬうちに飛び降りた。歩道にかたまっていた人々は劇場の中にはいった。散歩の人々は、劇場の中をのぞこうと首をのびしながら、歩道のがらんと^{ひとけ}人気のなくなったガス灯の光の帯をゆっくり横切って行った。一人の腕白小僧^{わんぱくこぞう}が口笛をふきながらやって来て、入り口のポスターの前に突っ立っ

た。やがてしゃがれ声で「いよう！ ナナ！」と叫ぶと、腰をふりふり古ぐつを引きずって立ち去って行った。どっと笑い声が起こった。紳士たちまで「ナナ！ いよう！ ナナ！」とくちまねをした。人々は押し合いへし合いし、検札場ではけんかが始まっていた。ナナと呼ぶ声、ナナを見せろと叫ぶ声が渦となって、喧騒^{そう}はいよいよ募り、理性を失った、がむしゃらな官能の炎が、群衆の上に燃えひろがって行った。

だが、この乱痴気騒ぎの上に、開幕のベルが鳴りわたった。《ベルが鳴ったぞ、ベルが鳴ったぞ！》というどよめきは大通りまで聞こえて来た。人々是我先に入場しようとして押し合いへし合いとなり、検札場にはなん人も応援が駆けつける始末だった。ミニョンは落ち着かぬ様子で、ローズの衣装を見に行こうとしたがらないシュタイネルをとうとう連れ去った。ベルが鳴り始めると、ラ・ファロワーズは早くも、幕あきを見のがすまいと、フォシュリーを引っぱって群衆をかきわけて行った。お客のこういった熱狂ぶりは、リュシー・ストウワールをいらいらさせた。婦人を押しつけるなんて、なんという礼儀知らずの人々だろう！

彼女はカローリーヌ・エケとその母親と共に最後まで残っていた。玄関にはもう人影も見えず、かなたの大通路には、依然どよめきが長く尾を引いていた。

——まるで、ここの芝居はいつみても面白いとでもいうみたいね、と階段をのぼりながらリュシーは繰り返していた。

場内では、フォシュリーとラ・ファローズが、自分たちの席の前に立って、改めてまたながめまわしていた。今は場内は明るく輝いていた。ガスの長いほのおが、切り子ガラスの大きなシャンデリアに黄色やバラ色の火の流れを点じ、それがまる天井から平土間に光の雨となつてくだけ落ちていた。座席の柘榴石色のピロードは、漆塗りのような木理を浮かべ、金泥は照りはえ、淡い緑色の装飾は、天井のあまりにもけばけばしい絵の下で、金泥のどぎつさを和らげていた。フットライトが上向きになると、突然ぱっと灯がともり、緞帳を明るく燃えたたせた。緞帳のどっしりした緋色の織り物は、おとぎばなしの宮殿のように華麗で、金泥塗りの割れ目から壁土が見えている舞台かまの貧弱さとはまるで釣り合わない。場内はもう熱か

った。譜面台の前ではすでに楽士たちがそれぞれ楽器の調子を合わせており、かすかにふるえるフリーユート、ため息をおし殺すようなホルン、歌うようなヴァイオリン、などの音が、しだいに高まって行く人声のざわめきの中に立ちのぼっていた。観客は、しゃべったり押し合ったりしながら、やっと席に落ち着くのだった。廊下の混雑ははなはだしく、どのとびらもあとからあとから押しよせる人波をかううじて流しこんでいた。人に呼びかけるしぐさ、着物と着物のすれ合う音、時折り黒い夜会服やフロックコートの交じったスカートと帽子の行列。しかし肱掛椅子の列はしだいにふさがっていった。ひととき目立って晴れやかな装いをした婦人もいれば、宝石の輝いているまげを傾けて、端正な横顔を見せている婦人もいた。ある棧敷には、絹のように白いあらわな肩のぞいていた。押し合っている群衆を目で追いながら、もの憂げに扇をつかっている、もの静かな婦人たちもいた。平土間特等席に立っている青年たちは、チョッキを大きく開き、くちなしの花をボタンあなにさして、手袋をはめた指先でオペラ・グラスをひねくっていた。